

## 要 旨

### 日常をテーマとした作品制作

#### ——詩的表現による特別な時間の発見——

津上 理奈

日常とは、常日頃、普段といった意味を持つ。しかし、人生の多くを占めている時間は本当にいつもと同じような当たり前の日々なのだろうか。この点に疑問を持ったことをきっかけに、日常のかけがえのなさや豊かさといった価値を作品制作を通して表現することを試みてきた。そこで本論文では、日常がいかに豊かでかけがえがない時間かを再発見することを目的としている。その方法としては、作品制作に加えて、日常というテーマのテキストを使った表現形式などの研究・考察である。

まず、第1章では、日常を語る上で重要なキーワードとして取り上げた無常とメント・モリについて考察する。何気なく過ごしている日常が、実は繰り返しの時間ではなく、常に死と隣り合わせであることについて再確認していく。

次に、第2章では、テーマに関連する作品を紹介する。日常というキーワードで作品を読み解くことで、作品で扱われている日常の多様性や、作家の日常へのまなざしが見えてくる。映画監督の小津安二郎、俳人の俵万智、詩人・童謡作詞家のまど・みちおの作品を取り上げ考察する。

さらに第3章では、テキスト表現の形式の実験性について述べる。作品制作において参考にした作家・作品について解説していく。例えばテキスト表現は、紙の上にとどまらず、様々なメディアを利用して作品化され鑑賞者にメッセージを訴えかけている。19世紀の詩人ステファヌ・マラルメ、現代アーティストのジェニー・ホルツァー、同じく現代アーティストであり、音楽家、平和活動家としても活動しているオノ・ヨーコを取り上げる。

これらを踏まえ第4章では、自身の作品について述べる。大学時代の作品を踏ま

え、大学院で制作した日常をテーマとした作品の詳細を述べていく。日常生活で実際に体験したことや感じたことを詩にし、それを原点としてオブジェや映像、インスタレーションなど実験的に様々な形式に展開した作品表現を詩的表現と定め、具体的な紹介と解説、そしてテーマの裏付けや作品の位置付けなどの検証を行った。

以上のようなテーマ研究や作品に関する研究、そして自身の作品制作を通して、日常という時間が不安定でかけがえのないものだという気づきを与える試みを行う。